

京都大学	博士(文学)	氏名	本 田 裕 志
論文題目	ベルクソン哲学における空間・延長・物質		
(論文内容の要旨) 本論文は、ベルクソン哲学の主要四著作のうち三著作の核心を空間、物質、延長、知性という根本概念の探求を通じて明らかにしようとするものである。本論文は14章からなり、第1～第6章が第1部、第7～第12章が第2部、第13・14の両章がエピローグとなっている。第1部の6つの章は、第1主著『意識の直接与件に関する試論』(1889年刊)から第2主著『物質と記憶』(1896年刊)までの時期における、ベルクソンの「空間・延長・物質」に関する所説について論じたものである。これに対して、第2部の6つの章では、第3主著『創造的進化』(1907年刊)を中心に、1901～30年ごろの時期における、同書とその関連著作群に見られる彼の同じ問題に関する見解を扱っている。また第13章は、2つの部を通した全体の結論の呈示であり、第14章は、在来の主要なベルクソン研究者の所説との対比を通じて本論文のスタンスを明らかにした付論である。 第1部では、次の諸点を明らかにすることをめざしている。(1) ベルクソンの「空間・延長・物質」に関する、またそれらと「持続・精神」との関係に関する見解は、『物質と記憶』において論じられているそれであること。なお、本論文ではこの見解を「修正された二元論」と呼ぶ。(2) 上の点に関する『意識の直接与件に関する試論』(以下『試論』と略記する)の見解は、一見したところ、上の見解とは著しく異なるように見えるが、それは同書の議論の焦点の絞り方からくる見かけの印象に過ぎず、「修正された二元論」は同書の時点からすでに一貫していること。(3) 両書のこの一貫性は、『試論』の副論文『アリストテレスの場所論』(1889年刊)の正しい理解と、両書の狭間の時期(1892～93年)にパリのリセ・アンリ4世で講じられた講義の検討とによって、さらに明らかになること。 第1章 『試論』に於ける「持続＝心的事象」と「空間＝物質」の関係 本章は、『試論』を単独で普通に読んだ場合に読み取れるような、空間および物質についての見解を略述する。この見解は、等質的環境としての空間と空間中に存在する物質を、純粹持続および心的事象に鋭く対峙させる二元論であるように見える。併せて、同書の執筆と並行して講じられたクレルモン・フェランにおけるリセ講義(1885～88年ごろの心理学・形而上学の両講義)にこの二元論がさらに明確に現れていることが、この時期のベルクソンの存在論的立場は尖鋭な二元論であったという印象を強めていることを指摘する。			

第2章 『試論』の二元論的解釈に対する疑義

本章は、(1) 前章に略述した『試論』の二元論的解釈のはらむ問題点を指摘するとともに、(2) これと異なる解釈の手掛りが同書に見出されることを明らかにする。(1)の問題点とは、空間中の物質的事象と持続する心的事象との時間的対応と因果関係、空間中の物質運動、心的事象の量的表象および意識内における外界表象の発生、等をめぐる理論的困難である。また(2)の手掛りとは、物質の持続性、等質的空間の観念性、等質的空間とは別な質的延長の存在、等を示唆する記述である。

第3章 『アリストテレスの場所論』における「場所」の概念

本章は、『アリストテレスの場所論』(以下『場所論』と略記する)全体の論旨を略述するとともに、これを単なる哲学史研究の論文としてではなく、空間・延長に関するこの時期のベルクソン自身の見解を示唆する著作として解釈し、主論文『試論』と一体を成しつつその論点を補うものとしてこの副論文を位置づけることを試みている。ただし、この種の解釈の先行例の多くが、近代的空間論の立場からアリストテレスの「場所」概念を批判した論文としてこれを捉えているのに対し、本章は次のような解釈を提示する。(1) 空間の実在性を否定して「場所」の実在性を主張し、物質を一種の生き物として力動的に理解するアリストテレスの立場を、『場所論』は「空間・延長・物質」に関するベルクソン自身の立場のモデルとみなしている。(2) 同論文はアリストテレスの「場所」概念の欠陥に一部補正を加えることにより、等質的空間と異なる実在的延長の概念へとこれを発展させるという方向性を示唆している。

第4章 リセ・アンリ 4世講義に見られる見解

本章は、リセ・アンリ 4世における 1892~93 年の心理学・形而上学の両講義に見られる「空間・延長・物質」についての講義内容を略述し、これが前章で『場所論』の示唆する「空間・延長・物質」論として指摘したものの継承・発展であるとともに、次章に述べる『物質と記憶』の所説を明確に予示していることを明らかにする。また、この両講義の議論になお残存している理論的未調整点についてもあわせて言及している。

第5章 『物質と記憶』における実在界のベルクソンの構図

本章は、『物質と記憶』に示されたベルクソンの実在界の全体像を略述し、その中で「空間・延長・物質」の位置付けを明らかにしている。その主要な点は、(1) 実在的持続に緊張・弛緩の度の差異を認めたこと、(2) 等質的空間を、空間化された時間としての等質的時間とともに、行動向けの記号的外界表象のための単なる観念的図式とみなし、これと異なる質的・具体的延長を実在的延長として認めたこと、(3) 物質は、具体的延長を有し、かつ非常に弛緩した持続を有する実在とされたこと、の3点である。この立場は、物質を持続 精神と同一本質の実在とみなす点で唯心論的一元論の性格を帯びつつ、物質と精神を持続の緊張度の違いによって明確に区別された互いに独立な二実在と考える点で、二元論の特質を維持しており、既述のように「修正され

た二元論」と呼ばれるべきものである。

第6章 二元論の難点はどのように解決されるか——外界知覚に関して

上述の「修正された二元論」は、通常の二元論には困難な、物 - 心両実在の相互作用に関する説明を容易にするという利点を持っている。本章では、『物質と記憶』が「外界知覚 記憶再認」に際しての人間の精神と「身体および外界」との相互作用を、この「修正された二元論」に基づいてどのように説明しているかを概説する。またそれをつうじて、第2章で指摘した尖鋭な二元論の諸問題点を、この説明がどのように解決に導いているかを明らかにする。

第2部は、次の諸点を明らかにすることをめざしている。(1)『物質と記憶』の「修正された二元論」の立場は、『創造的進化』にもそのまま継承されていること。(2)「修正された二元論」による物 - 心相互作用の説明は、『創造的進化』とその前後の関連諸著作では生命現象全般の説明へと拡大され、『物質と記憶』における人間の外界知覚作用の説明は、その一環として位置づけられていること。(3) 生命現象における「意識精神」の物質に対する作用は、前者の純粋な働きそのものと同じく「創造」と呼ばれるが、これは上の働きそのものを第一の局面としつつ、この働きの成果の物質的な実現ないし表現の過程としての第二の局面を持つこと。(4) 知性は、この第二の局面ための能力であるという本質的機能と、第一の局面を妨げずにこの機能を果たしうるといふ特色とを有し、人間は知性の発達により、両局面双方を遂行しうる唯一の生物となっていること。(5) 精神・生命および実在全般の持続 創造性の認識としての直観は、方法論的には、実在についての新たな認識の創造として、上の2つの局面に準ずる構造を有し、したがって知性のある働きを有する過程を含むこと。(6) 上の(5)の点を正しく捉えることにより、物質の直観的認識の厳密な方法についての見通しが開かれること。

第7章 『創造的進化』とその関連著作群におけるベルクソンの存在論的立場

本章は、『創造的進化』とその関連諸著作が、『物質と記憶』と同じく、物質に弛緩した持続を認め、実在的・具体的延長を等質的空間から区別し、等質的時・空間を行動のための観念的図式とする「修正された二元論」の立場をとっていることを明らかにする。ただし、「持続＝精神」および実在全般の根本性格としての「創造」性を強調し、ここから精神と物質を「自らを作る作用＝上昇」および「自らを解体する作用＝下降」として捉え、等質的空間をこの「下降」の極限として位置づけていることが、『創造的進化』において特徴的な点であることを、あわせて指摘する。

第8章 物 - 心相互作用としての生命

本章は、『創造的進化』が生命現象を、持続 創造性に緊張度の差異を認める「修正された二元論」によってのみ説明可能な物 - 心相互作用として捉えていることを明らかにする。同書によれば、生命の本質は意識 精神であり、これが創造性の稀薄な惰性的物質の中に入り込み、自己の創造性の産物である予見不可能な不確定性を挿入すること

が、生命の働きである。この働きも「創造」と呼ばれるが、この意味での創造は（i）予見不可能な「新しさ」そのものの創出としての純粋な創造と、（ii）この「新しさ」の物質的実現ないし表現、という2つの局面からなる。（ii）は生命が物質の惰性・法則性に妥協し、これを利用することによってのみ可能であるが、それは逆に（i）のさらなる進行の足枷となる。あらゆる生物種が（i）によって生み出されたにもかかわらず、人間以外は（i）を意識＝精神の自由な創造性としてそのまま発現させることができず、（ii）の機械的な繰り返しに陥っているのは、そのせいである。本章はさらに、生物における（ii）の遂行機構として、（a）エネルギーの蓄積と消費の機構、（b）神経系、（c）知覚機構、の3つが考えられていることを指摘し、とりわけ（c）の延長上に形成された知性の発達、（i）・（ii）双方を遂行できる生物という特権的地位を人間にもたらしめている、という見通しを示す。

第9章 知性的認識の生物学的起源と根本性格

本章と次章は、『創造的進化』と関連著作群における知性に関する所説について論じる。最初に、知性が本能と並んで上述の（ii）の局面の遂行能力として位置づけられていることを明らかにし、さらに両者の生物学的起源と根本性格の相違とを指摘する。次いで、知性の根本性格がいかにして知性に、（i）の遂行を妨げることなく（ii）の遂行のために働くことを可能にしているか、という問題の解明をめざして、知性的認識の諸特質を検討してゆく。これらは総じて言えば、「实在の、とりわけ意識＝生命の持続・創造性そのものを捉えることができない」というネガティブな特質であり、これを指摘したことは一般に「ベルクソンの知性批判」とみなされている。本章は、これらの特質が「等質的空間をつうじての物質認識の能力」という知性の根本性格を形成しており、これが「物質の惰性・必然性への生命の妥協」としての局面（ii）の遂行という知性の機能に即応していることを明らかにする。

第10章 知性的認識の実践的機能

本章は、「知性は行動・製作を司る実践的認識能力である」というベルクソンの主張を踏まえ、「行動・製作」が人間の創造的活動における（ii）の局面に相当することをまず明らかにする。次いで、さまざまなレベルにおける人間の創造的活動のプロセスについてのベルクソンの説明を分析し、このプロセスにおいて局面（i）は「動的図式」の創出として、（ii）はこの図式のイマージュ化として捉えられていることを指摘する。その上で、この「図式のイマージュ化」に際して既述の諸特質を持つ知性がどのように働くかの解明をつうじて、前章で立てた問題への解答を試みる。

第11章 物質の直観的認識の可能性

本章と次章は、物質を「持続する实在」としての側面から捉える直観的認識の可能性を展望する。本章はまず、ベルクソンの意味における「直観」が一般に「实在・精神・生命の本質である持続と創造性の直接的洞察」を意味することを明らかにし、次いでベルクソンの諸著作中で物質の直観的認識に言及しているいくつかの箇所を検討

する。そしてベルクソンが物質の直観の可能性を考えていることは明らかであるものの、その具体的方法論に関しては様々な困難が見通されることを指摘する。

第12章 物質の直観的認識の厳密な方法

本章は、ベルクソンの考える「厳密な哲学的認識」としての直観が、前章に述べた端的な意味での直観のみでは成り立っていないことを明らかにする。哲学的直観は、いわば実在についての新たな認識の創造として、第10章に見た人間の創造的活動のプロセスに沿って行われ、端的な意味での直観はその(i)の局面をなし、さらに(ii)の局面として、知性の働くあるプロセスがそこに含まれていなければならない。直観的認識の学問的厳密性を担保するのはこの知性的過程であり、この過程を含んで方法化された直観的認識による物質の把握は、前章に指摘した困難を免れているということが、本章の導く結論である。

エピローグ——第13章 本書全体の結論、第14章 付論

第13章は、以上の全体をまとめて本論文の結論を示し、あわせて意識と無意識、精神と意識の関係について、本論文で懸案となっていた問題についての解答を示す。また第14章は、ベルクソン研究において依拠すべき資料の選択、『アリストテレスの場所論』の解釈の仕方、『試論』と『物質と記憶』の関係および『物質と記憶』と『創造的進化』の関係等の問題点について、近年までの主要なベルクソン研究者たちの考え方を比較検討し、その中での本論文の立場を明らかにしている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、「時間」「生命」「直観」の哲学者として知られるベルクソンの哲学を、それらの対立概念である「空間・延長」「物質」「知性」に関するその見解をつうじて解明し、いわば「搦手からの攻略」によってその核心に迫ろうとするものである。この目標のため、本論文は、『道徳と宗教の二源泉』を除くベルクソンの主要三著作とそれに関連する同時期の諸論考をほぼ網羅的に精査するという作業を果敢に遂行しており、結果としてベルクソンの「理論哲学」の全体像を生き生きと浮かび上がらせる労作となっている。

第1部では、『意識の直接与件に関する試論』(以下『試論』)と『物質と記憶』という、ベルクソン前期の主要著作を中心として、これまで先鋭な二元論を展開しているとされてきた『試論』での議論を『物質と記憶』へとつながるものとして解釈し直すという作業が行われる。従来のベルクソン研究においては、イポリットやドゥルーズに代表されるように、『試論』の時期の二元論に由来する諸困難は、『物質と記憶』の段階になって「克服」されたとするものが多いが、本田氏の研究は、両著作の相違は、『試論』における議論の焦点の絞り方からくる見かけ上の印象であるにすぎず、ベルクソンの立場が、両著作を通じて、一貫して「修正された二元論」(つまり非デカルト的二元論)であることを明らかにした。ここでの主張に力強さと信憑性を与えているのは、両著作に対する「空間」「物質」といった概念を中心とした徹底した読解であることはいうまでもない。しかし、さらに特筆すべきは、そのような結論が、イポリットやドゥルーズにおいてはほぼ等閑視されていた『アリストテレスの場所論』や『リセ・アンリ4世講義』における同時期のベルクソンの思索を十分に検討した結果でもあるという点であり、これが本論文を独自の価値あるものとしている。とりわけ、学位論文である『試論』の副論文である『アリストテレスの場所論』への注目は、『試論』の時期のベルクソンが、「等質空間とは異なる具体的延長」という『物質と記憶』につながる発想をすでに得ていたことを証示するものであり、貴重な指摘であるといえよう。

第2部においては、主として前の二著作における「修正された二元論」の立場が、第三の主著である『創造的進化』においてもそのまま堅持されているということが示される。これまで、この著作を重要視する研究者は、たとえばジャンケレビッチに代表されるように、『物質と記憶』にみられるような、物質に関する脱二元論的発想にもとづく存在論が、『創造的進化』に至って、意識が物質から解放されて「純粹意識＝生命の躍動」の本源性を回復することに完全な自由の理想をみる神秘主義的立場へと昇華したとみることがあるが、本田氏は、これをユードにならって「ベルクソンの幻影」として退ける。この作業もまた、『創造的進化』のみならず、『精神的エネルギー』や『思想と動くもの』に代表される同時期の諸論考を十分に検討したうえでなされるのであるが、結果として、しばしば安易にベルクソンに帰せられる「反知性主義」とい

うレットが的外れであることが明示されるという重要な成果を伴っている。「創造」ということとの関係でいえば、(i) 予見不可能な「新しさ」そのものの創造としての純粋な創造と、(ii) この「新しさ」の物質的実現ないしは表現という二つの段階のうち、(ii) の段階に関わるものとしての知性の果たす役割が、これまでのベルクソン論の多くでは等閑視される傾向にあった。このベルクソンの知性論に関する重厚な記述は、それ自体が独立した意義をもつものであるが、本論文においては、『試論』から『物質と記憶』を経て『創造的進化』へと至るベルクソンの存在論の一貫性を証示するという目的にとって不可欠のものであったというべきであろう。

総じて、本論の主張は、物質に精神とは異なる存在論的立場を与えるという意味では二元論的にみえるベルクソンの哲学の核心が、精神の根本的特質である持続、創造性を、物質をも含む実在全般の根本的特質とみなすという点において従来の西洋哲学における二元論とは根本的に異なっており、要は実在の持続の緊張度の差異という点に物質と精神の差異を求める「修正された二元論」であるという点にある。この結論は、従来のベルクソン研究に比して、「物質」「空間」「知性」という概念群に関する、より徹底した論究のすぐれた成果であるとみなすことができよう。すでに書籍として公刊されている本論文は、今後のベルクソン研究にとって必読の重要文献となることは疑いをえない。

ただひとつだけ気になる点をあげるとすれば、過去の代表的なベルクソン研究に対する論者の解釈と評価が、巻末の「付論」にまとめられており、本論中での言及が少ないという若干異例の体裁をとっているため、論者の長年にわたるベルクソン研究の発展に、それらの二次文献がどのように寄与したのかがややわかりにくいという問題がある。しかし、これは本論文の独自の意義をただちに損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十二年六月十七日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。